

# 気になる生徒へのかかわりを通して、 より良い人間関係をはぐくむ学級集団の在り方の研究

- ソーシャルスキルトレーニングを通して -

武雄市立武雄中学校 教諭 岩永 順子

## 要 旨

本研究は、教育相談係が担任に代わり、ソーシャルスキルトレーニング（以下SSTと略す）を学級集団に実施し、それと並行して、特にソーシャルスキルが身に付いていない生徒に個別にかかわることで、学級集団の人間関係を良くすることを目標に実践的研究を行ったものである。集団支援と個別支援のスキルの内容を関連させたり、個別支援では、生徒のペースに応じて細やかな指導を行ったりして実践していった。人間関係がうまくいっていなかった生徒が、学級の中でリハーサルを行うことで実践化への自信を付け、積極的に友達とかかわろうとするような変容が見られた。また、SSTのモデリングの段階では、生徒が出演する自作のビデオを活用することで、興味をもって観察することができ、モデリングの効果を高めることができた。

<キーワード> ソーシャルスキル SST モデリング 集団と個別

### 1 主題設定の理由

近年、子どもたちを取り巻く社会環境は、少子化・核家族化、地域の結び付きの希薄化などの変化の中で、日常生活での体験を通して、人間関係の基本的な知識と技能を学ぶ機会が減ってきた。その結果、人とかかわり方を知らない子どもやかかわり方を知っていても実践する能力や態度が身に付いていない子どもが増えてきている。そのため、学校が、人間関係をはぐくむ場としての機能を果たさなければならなくなっている。学校での集団活動では、生徒が抱える人間関係に関する問題が見えやすく、生徒の変容をねらった場面も意識して作ることも可能で、指導を行いやすい状況がある。教育相談係として生徒にかかわる場合は、担任と連携しながら、個々の生徒が抱えている適応上の問題に個別に対応し、人間関係スキルを学ばせる方法となる。しかし、学級集団にもSSTは不足しているため、学級にも個別支援の内容などと関連付けてSSTを行うことができれば、学級の人間関係を良好にするばかりでなく、個別の支援が必要だった生徒を受け入れる風土がはぐくまれる。個別に人間関係スキルを学んだ生徒が、学校生活に適応しやすい環境ができ、より良い人間関係をはぐくむ学級集団づくりにつながるであろうと考え、本研究主題を設定した。

### 2 研究の目標

学級に対してSSTを活用するばかりでなく、気になる生徒への個別の支援も行うことで、生徒同士のより良い人間関係をはぐくむ学級集団づくりを探る。

### 3 研究の仮説

学級全体には、SSTの集団支援を行い、人間関係に関する知識や技能を身に付けさせ、特にスキルが不足している生徒に対して、個別にスキルの習得を支援すれば、生徒相互のかかわりが円滑になり、より良い人間関係をはぐくむ学級集団になるであろう。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 研究の内容

- ア S S Tの理論研究を行い、実施の留意点を探る。
- イ 対象学級の実態調査を行い、S S Tの内容の検討と方法の研究を行う。
- ウ 対象学級の実態調査から気になる生徒を抽出し、S S Tの内容の検討と方法の研究を行う。
- エ 仮説を検証するため、所属校の1年生に5時間の集団支援を行い、スキルが不足している生徒（以下抽出生徒とする）を個別に支援する。
- オ S S T後の実態調査より、よりよい人間関係をはぐくむ学級集団についての考察を行う。

### (2) 研究の方法

- ア S S Tについて、文献や資料を基に理論研究を行う。
- イ S S Tを集団支援と個別支援に関連付けて行い、生徒の変容を検証し、考察する。
- ウ 研究の成果と課題をまとめる。

## 5 研究の実際

### (1) S S Tの理論研究

#### ア ソーシャルスキルの概念

ソーシャルスキルとは、対人関係を営む技術、コツのことであり、体験を通して学んだ人付き合いのやり方である。ソーシャルスキルの考え方では、問題行動の原因を ソーシャルスキルの知識や概念を学習していない、知識はあるが実践する能力や態度を身に付けていない、ととらえている。よって、S S Tを行えば、対人的な反応を具体的にどうすれば良いかが分かり、現在の適応上の問題を改善したり、将来起こりうる問題に対して予防的効果が期待できる。

#### イ モデリングの考え方

S S Tの基本的な進め方は、目標となるスキル（以下ターゲットスキルとする）を段階的に習得可能なようにプログラム化し、インストラクション、モデリング、リハーサル、フィードバック、定着化という手順を踏む。S S Tにおいて、モデリングは主要な構成要素である。よって、モデリングを行う際に最も重要なモデルの提示方法を工夫することにより、スキル習得の向上をねらうことにした。効果のあるモデリングをするための要因について、J・D・ボールドウィン&J・I・ボールドウィンは、「観察者がモデルと強い類似性や親近感をもつこと。モデルと観察者が同様の活動に従事していること。（引用者による要約）」<sup>(1)</sup>と述べている。このことから、教師が生徒にモデリングをするだけでなく、生徒が出演するモデリングのビデオを制作し見せることで、より高い効果が期待できる。

### (2) 実態把握

対象学級は、日ごろから元気で活発な生徒たちが多いが、他の生徒とのかかわり方については、配慮が足りない言動が目についていた。非常におとなしく、他者とのかかわりが少ない生徒がおり、人間関係づくりにおいて支援の必要性を感じた。実態把握には、「Q-U学級満足度尺度」「Q-U学校生活意欲尺度」「ぼえむ 生徒理解カード（以下「ぼえむ」とする）」「学校生活で必要とされるソーシャルスキル尺度（以下「ソーシャルスキル尺度」とする）」の質問紙法にて調査した。

#### ア 学級集団の特徴

「Q-U学級満足度尺度」「Q-U学校生活意欲尺度」「ソーシャルスキル尺度」では、全体的に全国平均と変わらない標準的な学級であった。図1においては、周囲とのかかわりを適切に行っている「適応型」が全国平均を下回り、かなり無理をして極端な態度で人とのかかわりをもっている「過剰適応型」や一定の方向性が見られず、どうしてよいかははっきりしない「不確定型」が多い結果にな

った。この結果から、適切な人間関係のスキルが身に付いていないことや不適切なスキルで対応している生徒が多いことがうかがえる。

イ 抽出生徒の特徴

「Q-U学級満足度尺度」で要支援群に属し、図2において、特に、「学級関係」「友人関係」において低い結果が出た。図1においては、不確定型に属し、「ソーシャルスキル尺度」では、「かかわりのスキル」が低い結果だった。以上のことから、学級集団の中での友達とのかかわりが少なく、かかわる機会があってもどうしてよいか分からなかったり、周囲に合わせていたりしている様子うかがえる。

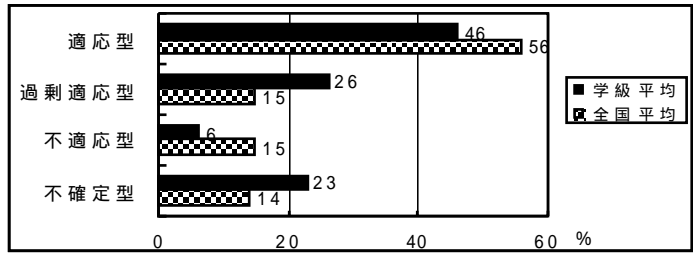


図1 対象学級の「ぼえむ」適応のタイプの出現率

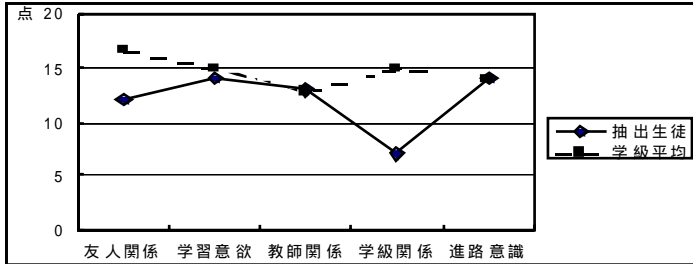


図2 抽出生徒と学級の「Q-U学校生活意欲尺度」得点

(3) SSTを活用しての全体構想 (図3)

生徒の実態より、教育相談係として、SSTを活用し、集団支援と個別支援を行う。特に、スキルが不足している抽出生徒に対しては、放課後を利用して、個別にスキルの習得を支援する。学級に対しては、集団支援で人間関係に関する知識や技能を身に付けさせ、定着化させることによって生徒相互のかかわりが円滑になって人間関係が深まり、より良い人間関係をはぐくむ学級集団になるであろうと考えた。

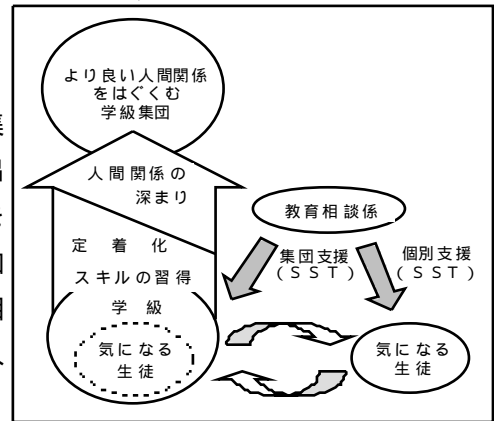


図3 研究の全体構想図

(4) ターゲットスキルの設定

生徒たちは、初めて

表1 ターゲットスキルの設定と個別支援の内容

時数	難易度	スキルの分類	ターゲットスキル	活動内容	抽出生徒への主な支援
第1時	初級	コミュニケーションスキル	あいさつの仕方	気持ちの良いあいさつをしよう	個別支援の確認
第2時			聴き方	元気の出る聴き方をしよう	共通非言語スキル
第3時	中級	受容・共感スキル	働き掛け方	気持ちを分かって働き掛けよう	共通非言語スキル
第4時			仲間の誘い方 (仲間の入り方)	上手に友達を誘ってみよう (個別支援のみ実施)	共通非言語スキル 仲間の入り方
第5時	上級	主張スキル	断り方	やさしく断ってみよう	定着化の確認

させられるものは続けて設定し、抽出生徒が学級の生徒とかかわりやすくなるように、集団と個別へのスキルの内容を関連付けるように設定した。

(5) 集団支援と個別支援の実践

検証の視点	検証の視点に関する手立て
スキルの理解	理解しやすいように、板書の工夫や絵や写真の活用、デモンストレーションなどを行う。 日常的場面を取り上げ、スキルのポイントについて分かりやすくまとめた生徒出演のビデオを活用する。
スキルの定着化	1週間のホームワークを出し、定着化のきっかけとする。 スキルのポイントを教室掲示し、常にスキルを意識させる。 スキルのまとめと生徒の授業やホームワークの感想を配布し、実践の意欲を高める。
人間関係の深まり	ニックネームで呼び合い、新たな人間関係を作りやすくする。 ペアやグループ作りは、ゲームやくじで行い、偶然性をもたせて、新たな人間関係を作るきっかけにする。 生徒同士でかかわりをもてるリハーサルを設定し、話し合いをもつことで他者への理解を深めさせる。

個別支援（第1時）		
段階	抽出生徒の活動	教師の支援
	<b>目標</b> S S Tに取り組もうという気持ちをもてる。 今後のS S Tの見通しをもつ。	
参入 / 自己探索 / 自己理解 / 行動化	学校生活の様子を振り返る ・ 休み時間の過ごし方 ・ 友達関係について  友達へのかかわり方を振り返る。 ・ 友達が誘ってくれるのを待っている。 ・ 誘いが分からない。 ・ 話が続かない。 ・ 人とかかわり方を勉強すればできるようになる  S S Tを知る。  S S Tに取り組む意志をもつ。  実践に向けての課題を確認し、見通しをもつ。  次回のスキルの予習をする	親身になって、かかわろうという気持ちをもっていることを伝えるようにする。  日頃の生活や友達関係にふれ、抽出生徒の悩みを把握する。  抽出生徒の友達関係に関する課題に気付かせるようにする。 ・ 自分から、かかわろうとしない。 ・ 自分の意志を相手に伝えきれない。 ・ 表情が乏しい。  S S Tを紹介する。  目標を明確にし、S S Tに取り組むことを確認する。  今後のS S Tの見通しをもたせるようにする。  次回の「元気の出る聴き方」のスキルのポイントについて説明する。

集団支援（検証授業 第3時）		
場面	主な学習内容	教師の支援
	<b>目標</b> 「気持ちを分かって働き掛ける」方法を理解できる。 他者とかかわりを積極的に行うことができる。	
インスタレーション / モデリング	前回の復習をする。  ターゲットスキルの確認  ビデオ視聴  スキルのポイントの確認	ニックネームを書いた名札を付けさせる。(手立て) 「上手な聴き方」のポイントを復習させる。(手立て) 「気持ちを分かって働き掛ける」ポイントに関連し、写真、デモンストレーションをして分かりやすく説明する。(手立て)  <b>【生徒出演の自作ビデオ】</b> 場面設定の説明 不適切な例 適切な例 スキルのポイントのまとめ  黒板にスキルのポイントを分かりやすくまとめる。(手立て)
リハーサル	ペアを作る。  リハーサルの方法の確認  リハーサル  話し合い 感想の発表 振り返りシートの記入 ホームワークの配布	くじで偶然的にペアを作らせる。(手立て)  気持ちをわかって働きかけよう！ ニックネーム( ) 1. 真顔に、友達と会話をしてみよう。 話し手の人は、できるだけわかりやすく友達に話をしましょう。 聴き手の人は、友達の気持ちをわかって自分の気持ちも伝えましょう。  2人組になり、会話をさせる。(手立て) 2人組でリハーサルのときの気持ちについて話し合う。(手立て)
フィードバック	次回の確認 	1週間、学校生活での実践を記録して伝えるように伝える。(手立て)

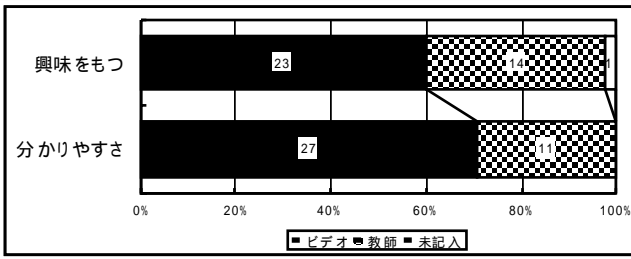


図4 ビデオと教師によるモデリングの比較

(6) 結果と考察

ア 検証の視点（スキルの理解）

スキル理解の手立てとして、モデリングの工夫を行ったが、図4において、生徒の出演した自作ビデオの方が、興味をもち、分かりやすいことが分った。また、毎時間の振り返りシートを見ると、ほとんどの生徒がスキルについてほぼ理解し、S S Tのリハーサルでは、意識して実践できている様子分った。集団支援を通してみると、スキルのポイントについて、これまで実施できていなかった課題が多いほど、集団支援に対する生徒の態度が意欲的だった。以上のことより、集団支援に意欲的に取り組ませる方法としては、ターゲットスキルの設定は、普段の生活で生徒が実践できていないものを取り上げることが大切である。また、スキルを理解させる手立てとして、モデリングに、生徒が出演するビデオを活用することは、生徒の興味を引き、とても有効であると言える。

イ 検証の視点（スキルの定着化）

スキルの定着化の手立てとして、ホームワークを実施したが、8割の生徒が毎日実践し、集団支援

後も意識して行うことができていた。SST終了後、人間関係の変容について調査した結果、7割近くの生徒が、変容の度合いに差はあるものの、「変容した」と答え、スキルを実践していることがうかがえる。しかし、スキルを定着化させるためには、継続して生徒にスキルを意識させることが大切で、実践の場の設定や日常場面での担任の働き掛けが必要であると言える。

## ウ 研究の視点（人間関係の深まり）

### (ア) 学級の変容

振り返りシートでの生徒の感想からは、他者とのかかわりの中で気持ちの良い体験をしている様子がうかがえたが、SST実施後に行った実態調査の結果からは学級の変容はあまり見られなかった。

図5において、個別の変容を見てみると望ましい方向に変化している生徒たち(Aグループ:11名)と、望ましくない方向に変化している生徒たち(Bグループ:12名)があり、SSTとの関連を調べてみた。図6より、Bグループでは、半数以上の生徒が変容していると感じていなかった。図7より、Bグループでは、SSTは「余り必要でない」と感じている生徒が半数以上おり、「普段から当たり前に行っている」や「人づきあいが少ない」という理由を挙げていることからSSTを学ぶ意欲が高まらなかったと考えられる。また、これらの生徒は、SST実施後も誘い方や働き掛けなどの周囲にかかわろうとするスキルを余り実践していなかった。このことから、「普段から当たり前に行っている」と言っているものの、Bグループの生徒は、限られた友人関係の中では、スキルを実践しているが、その他の友達とのかかわりを余りもたない傾向にあると思われる。Aグループでは、SSTの必要性の理由として、疑問の解決や自己・他者理解、実用性の認識など多岐にわたっていた。SSTを通して、自己の変容に気付いたり、友人から認められたりする経験から、SSTの必要性を感じる事ができたと思われる。

以上のことより、Bグループの生徒の変容のために必要なこととしては、教師は、生徒がよくできた部分をほめたり、不十分なところがあれば、分かりやすくアドバイスすることで、自分のスキルの在り方をしっかり振り返らせるようにする。リハーサル後の生徒同士の振り返りは、互いを認め合う時間になるようにし、他者の気持ちに関心をもったり、かかわりの楽しさを感じさせるようにする。このような手立てをすることで、適切なスキルで広範囲の友達との関係をもつことができると思われる。

### (イ) 抽出生徒の変容

集団支援の様子は、いつもにこやかで友達と行うリハーサルにも一生懸命に取り組んでいた。集

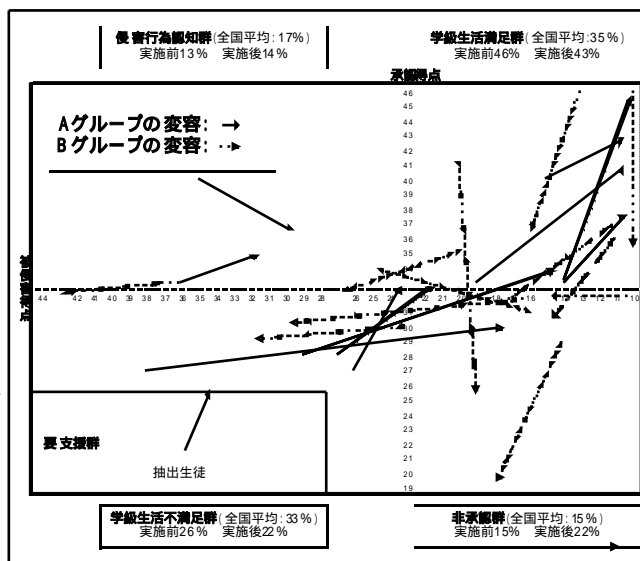


図5 Q - U学級満足度尺度の変容

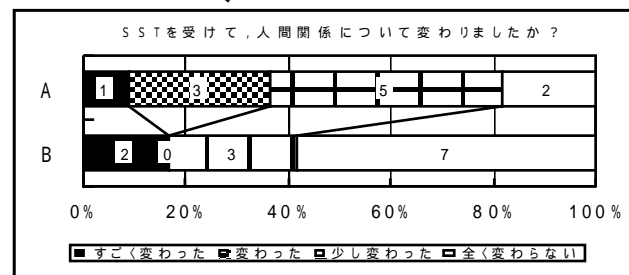


図6 人間関係における尺度

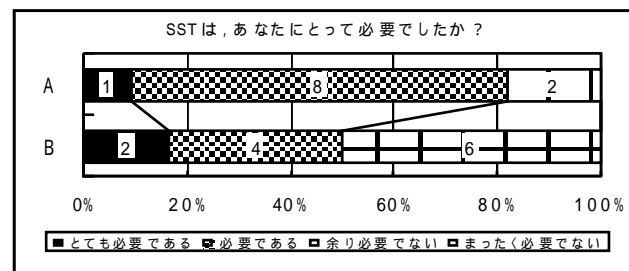


図7 SSTの必要性

団支援後の取組の質問では、すべて「楽しかった」と答えている。普段、話す機会がない友達とかかわりがもてることをとても楽しんでいようであった。個別支援では、徐々にスキルが身に付いていることが分った。できていることをほめ、自信をもって実践していくように働き掛けた。実践しているスキルに関する質問では、「気持ちの良いあいさつ」以外は実践していると答えている。人間関係の変化についての質問には「変わった」と答え、「友達と前よりしゃべりやすくなった」と変化の内容について書いている。図5（抽出生徒は で表示）において、承認得点上がり、学校満足度が向上したことで、抽出生徒にとって、個別支援と集団支援は効果的であったと言える。

#### (ウ) 集団支援と個別支援の相互作用

個別支援では、抽出生徒の実態に合った細やかな指導を通して、スキルを身に付けさせることで実践する自信をもたせるようにした。さらに、学んだスキルを集団支援の中で練習することで、段階を積みながら、日常場面での実践につなげやすくした。抽出生徒は、集団支援では、個別支援で練習をしていることの自信や学級内で自分を出しても受け入れてもらえる安心感の中で、積極的に発言をしたり、素直に自分を出して、友達とのリハーサルを上手に行っていた。また、これまであまりかかわりをもっていなかった友達が、自分を受け入れてくれた喜びを味わうことができ、実践への自信となっていた。集団支援では、SSTによって、周囲に無関心だった生徒の中に、孤立している友達へ声を掛けるなどの配慮が出てきた。SST実施前は、友達とのかかわりがうまくできず、話も続かなかった抽出生徒であったが、かかわりをもってくれる友達にうまく対応でき、話をよくするようになってきている。こういうかかわりをきっかけに、生徒たちが他者へのかかわりをもち、配慮できるようになることで、学級集団の人間関係がよりよいものとなると考えられる。

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

ターゲットスキルの設定が生徒の集団支援への意欲に直接つながるため、生徒がどのようなスキル学習を望んでいるかを十分に検討し、計画することが大切である。

SSTの中で、教師や級友から、フィードバックを受けることは、生徒自身のスキルの技術を見直すことになったり、実践への自信となる。

抽出生徒は、集団支援と個別支援を並行して行うことで、スモールステップの練習場면을積み、スキルの実践に自信を付けていった。また、集団支援によって、学級のスキルが高まることで、双方のかかわりが増えていく結果となった。

同世代の人が出演するビデオは、生徒の興味・関心を高め、スキルのポイントを押さえやすい。また、教師がモデリングを練習する手間も要らず、すぐに活用できるので、現場での実践がしやすい。

### (2) 今後の課題

SSTの指導に関しては、発達段階を考えて安心してリハーサルに取り組めるルール作りが必要である。また、定着化は難しく、場面設定を意図的に行い、継続して指導していくことが必要である。

個別支援を必要としている生徒たちは多いはずである。その実態と生徒たちが必要としているスキルの実態を充分把握して、ターゲットスキルの設定を行っていく必要がある。

## 《引用文献》

### (1) J・D・ボールドウィン&J・I・ボールドウィン著

『日常生活の行動原理 学習理論からのヒント』 2003年 ブレーン出版 p.31

## 《参考文献》

- ・ 小林正幸・相川 充編著 『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる小学校』 1999年 図書文化社